めいぢ廿九年
ひいのとうし
春

春園子の
ほそぢ
つゆあけ
ゆれ角

九

梓筆作研
畫英
亭梅樓紅蘭

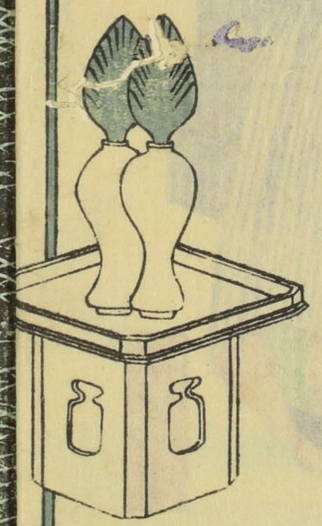
へ13
3697
9

柳葉金紙
九篇上

門ぺ13
號3697
9

鼠通夜譚

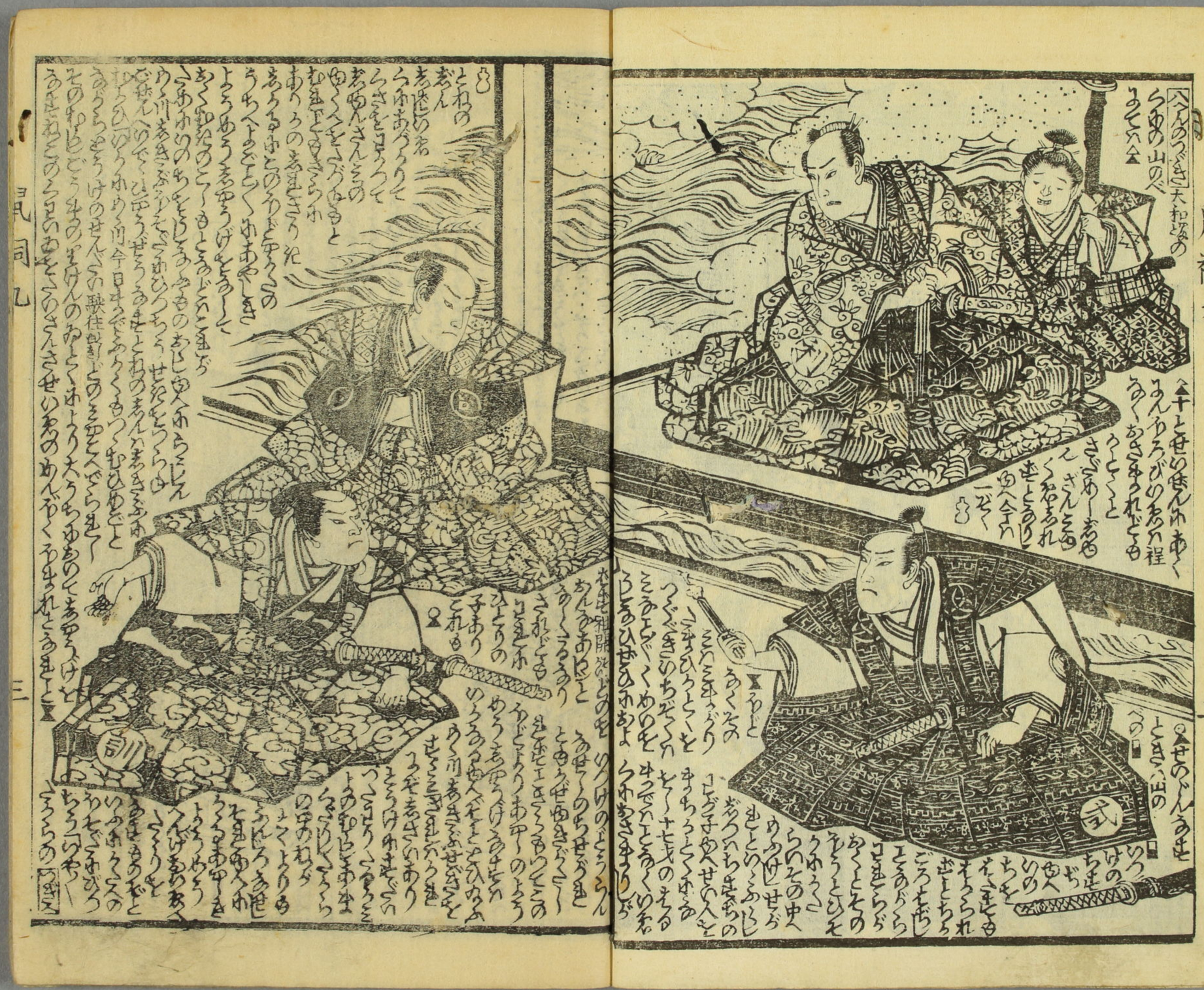
柳亭種彦著
梅堂國貞畫



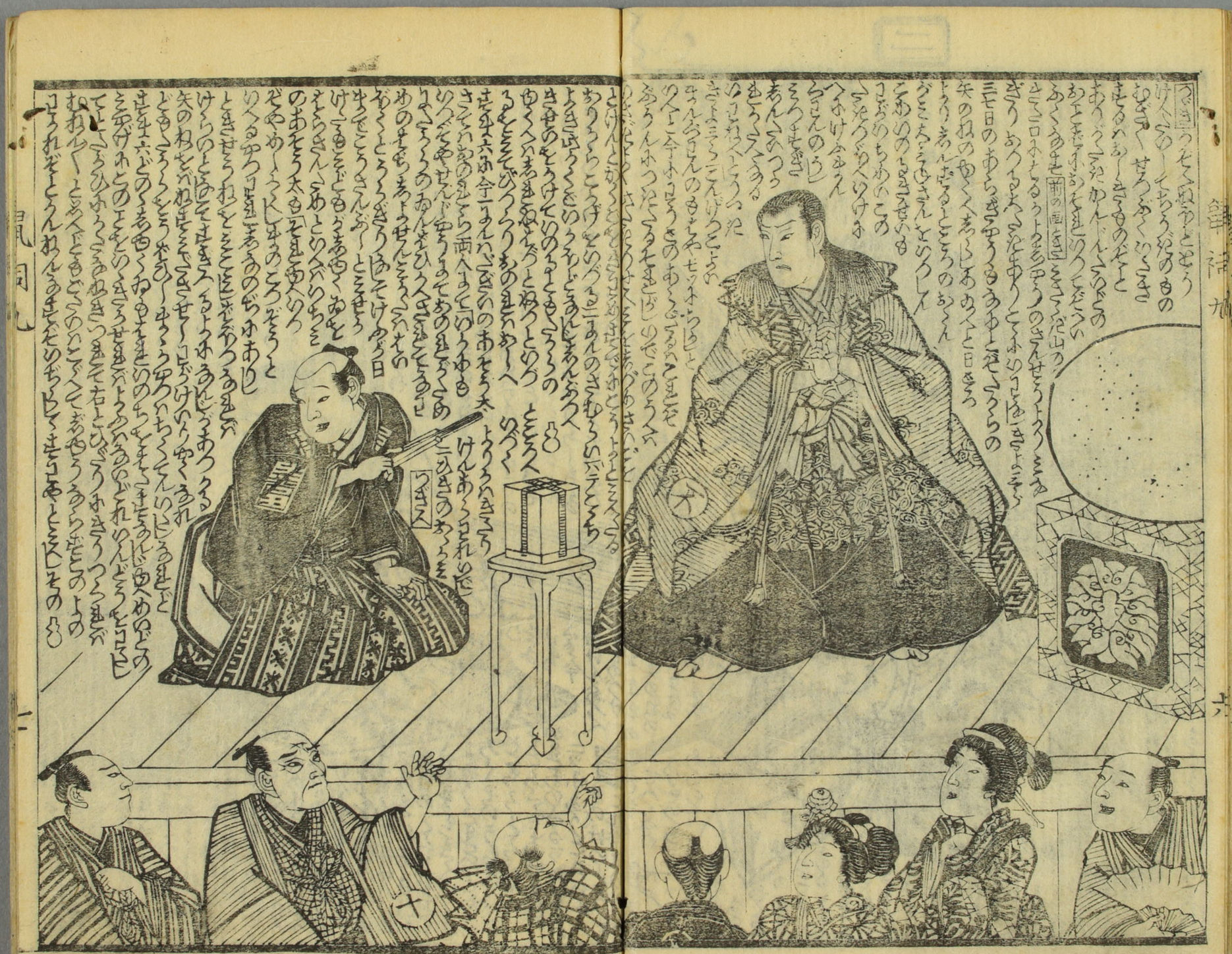
通夜譚の其先いろゝの筋とは尋あれど元来何の工とゝのへれば
其あのさろよ差支鼠の祠の今巻るれが先そのさ犯人猫が頭れ
猫を防ぐの釣合るれが狼ぐらひ宜ーゝろんと三峯山の御狗
もそ大峯山へ借りて行き淨三郎ふ利益を與へ夫よて猫ハ防
ぐんるれと牧其先い如何せん犬ふ増し獣物ふのまゝ差づあ
馬がろろろんと馬勅といふる名前自性以後世ハ地獄へおち
馬ふ成る事疑ひるゝと曲亭翁の聲音を遣へば或る人難ゝ
て狼ふい馬い中ゝ及ぢゝと批判と打まて取敢ず牛を引出し
兼永ゞ渋峠ふて危難の珎説牛ゞ出れが程るゝく大尾モウ引
ふ仕舞と申ふこて

柳葉舎ちどりこ

大年屋米吉
悪者 馬勃の霊
泉兼永
娘 小半
善光寺怪談廻り
うて後世をさとる



浄



つぎはうそくはやとさう
けくらのーそあろうがあものの
ゆがさく　せろぶくいろさま
まるいあーきものがと
あくぐくこたかんーんいどの
あとまだいろをまいろくだろい
ふくうのまも　前の面とき　ままくだ山の
さてこロはたるうよるるのうのさんせうよろいまま
ぎうあくはたくるたもやりとくはのうとゆこそくらの
三七日のあらぎやうるゆゆこそくらの
矢のれのやくくあくしあめくと日ぎろ
ようあんだるとくろのあくん
ぐとたうひさんをいろしん
こあいのうきさせいも
こぶのちあいこの
うそうりくいけゆ
へゆけふゑん
らさんのう
ろうもぎさ
あんあつう
もろくくるる
いうれくとうつた
さくよこうこんげうとう
ゆんんくうくくく

馬

家内實母散

さんぜんさんご　中橋南傳馬町東側
ふとんちまみち　千葉堂孝輔製
一四めが〆

柳蔭月朝妻　六編追出板　山々亭有人作　捕朝樓國貞画

藪黄鶯八幡不知　五編追出板　山〻亭有人作　錦朝樓芳幸画

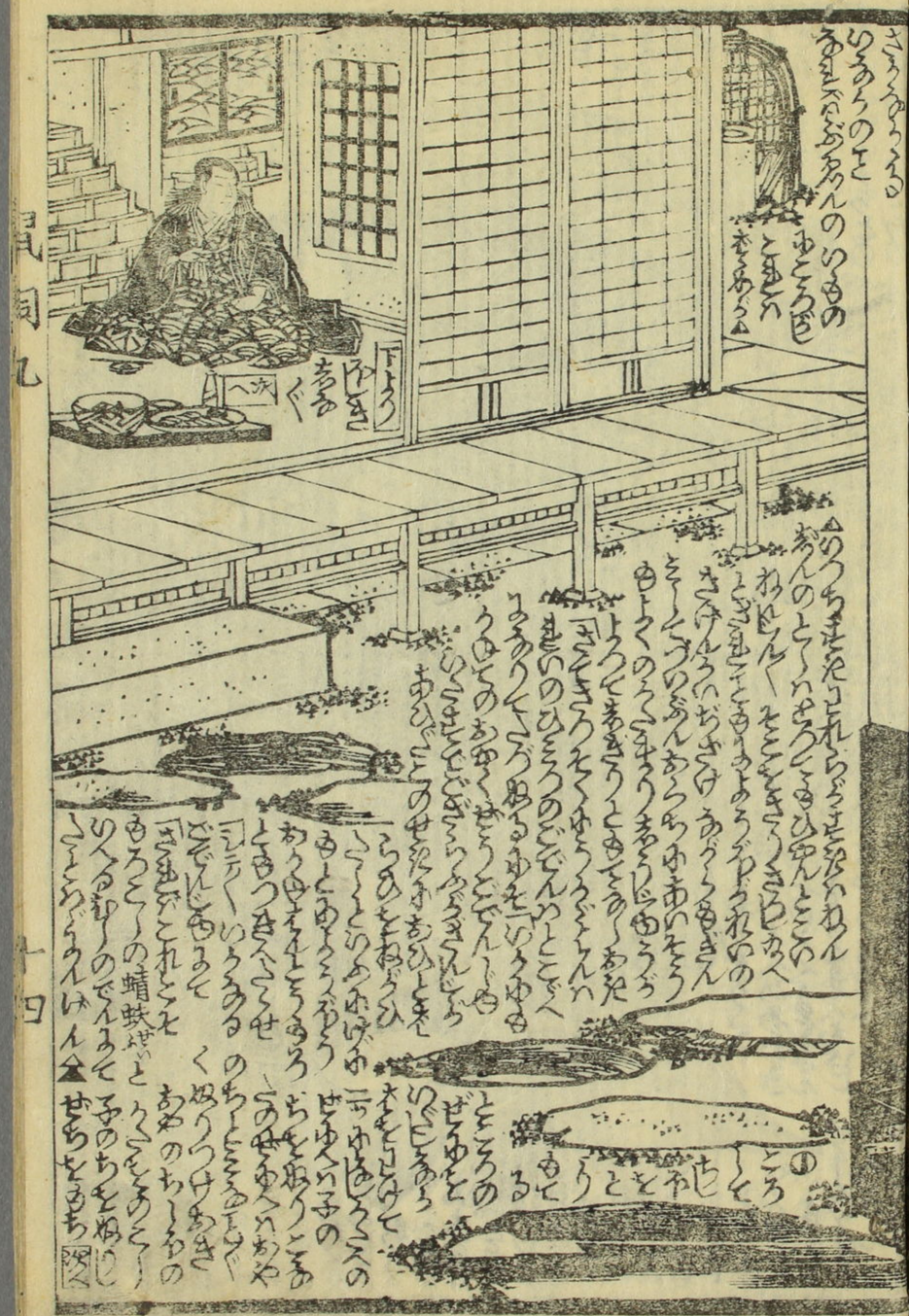
阿玉ヶ池櫛月形　初編ヨリ追々出板　山〻亭有人作　陽齊・豊國画

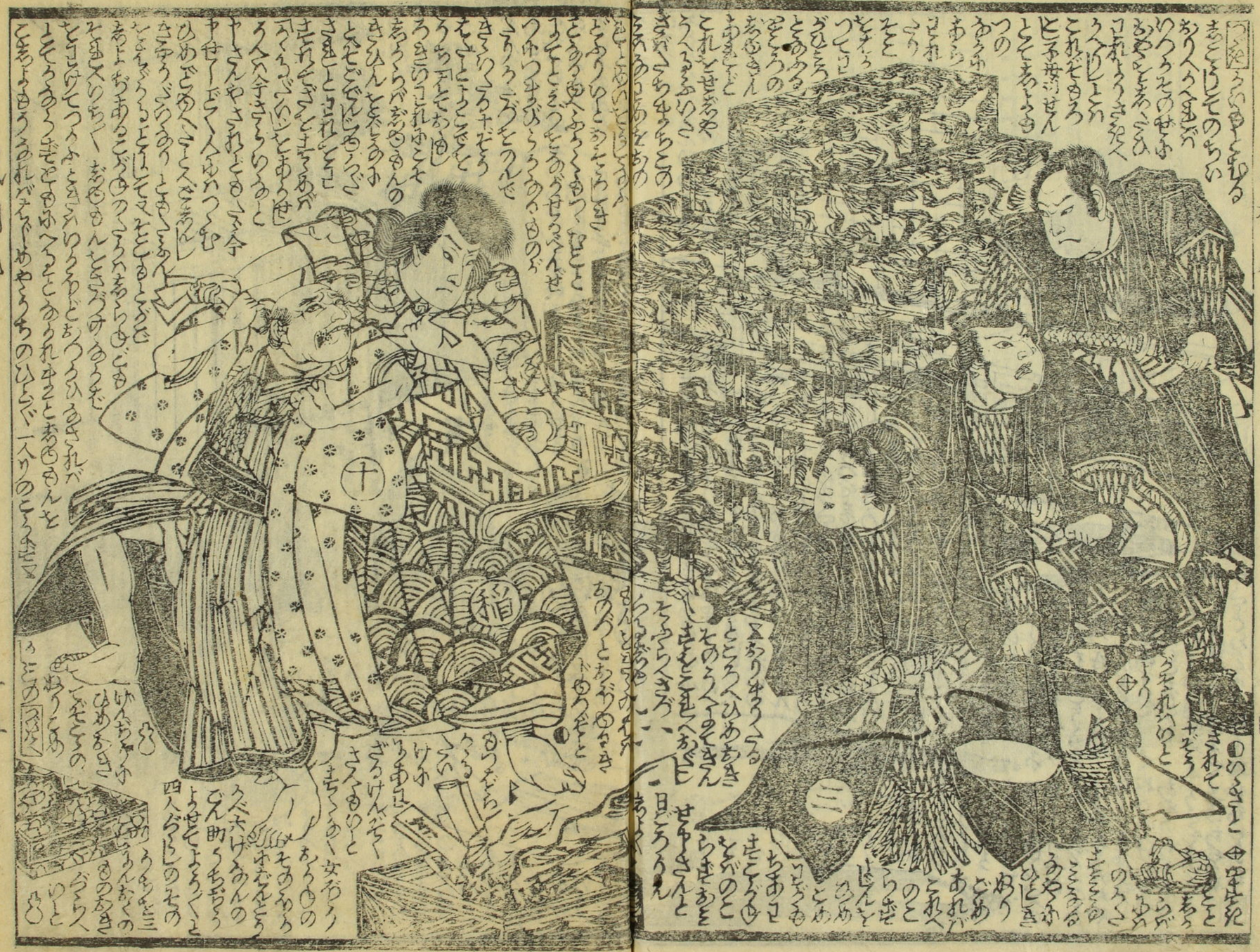
地本綿繪團扇問屋　紅英堂　蔦吉

九篇下
國政画

寒頭船西廻羅通野譚

下



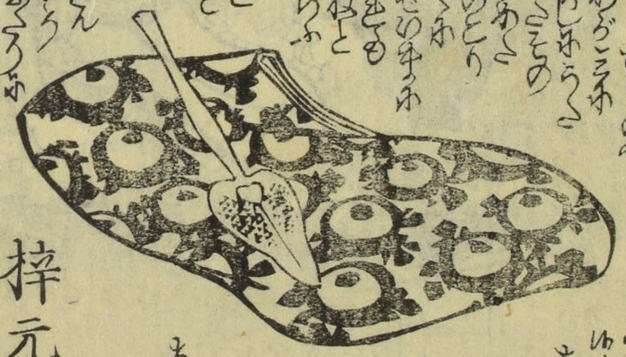


白

國政画圖

つぐき白太夫けゆもとろとこれものとこのゆとまとまんめうとらつはいちろうくろらの矢のねとりいぐすけびいのるそいてれとえるとりうもれとこれをもこそ四年ろこのゆ年のべすさいいのとうわろうはのそろとろよのむはしわまとくぐしきとうの矢のねわわくぐるゆとわくときくまとて白太夫ととしてれまをとゆくんぐわわされものつぐやえきくぐき四年ろわてれとうりたものくかきとるいちぐめそふくぎの矢のねろくるくろらのとふいるろうくれそまをせうとわちくりくちきまぐのてぐるいわらぎるろとりのゆろちのの巻を巻八全

竹葉舎綴



梓元
紅英堂
欽白

全ろくえふわちちるかくそでのゆふいのもろゆめをつけとりやとれ四ちり四年のべまてりのもろひわぐこれひまのべろさろふきとそふくれときふふろうぐきくれこんろぐめさ泥ふのとりこんろまもらまもちろふくれそめくゆまもろ年ちそのふれありへたあるひしろこまもひろうそろこの矢のねとりろくるとうもくまとをもうとのゆうとこれとのるとくまとてとこのあと十へんいのもよときろれゆふきうぐきあゆくぐんつふゆろうろうのじふろしゆまのくゆまろくまもちんもとあとこひゆうぐんのわどをひくへふれこひれわぐひあけくへゆろくゆ以上

明治七年甲戌陽春開板標目

厚化粧萬年嶋田　八編　春水作　九編　十編　国貞画

室町源氏胡蝶巻　廿三　種彦作　出板　国貞画

鼠祠通夜譚　八編　種彦作　出板　国貞画

童謡妙々車　二十九　種彦作　出板　国貞画

薄倭初日記　廿迫　春水作　出板　国貞画

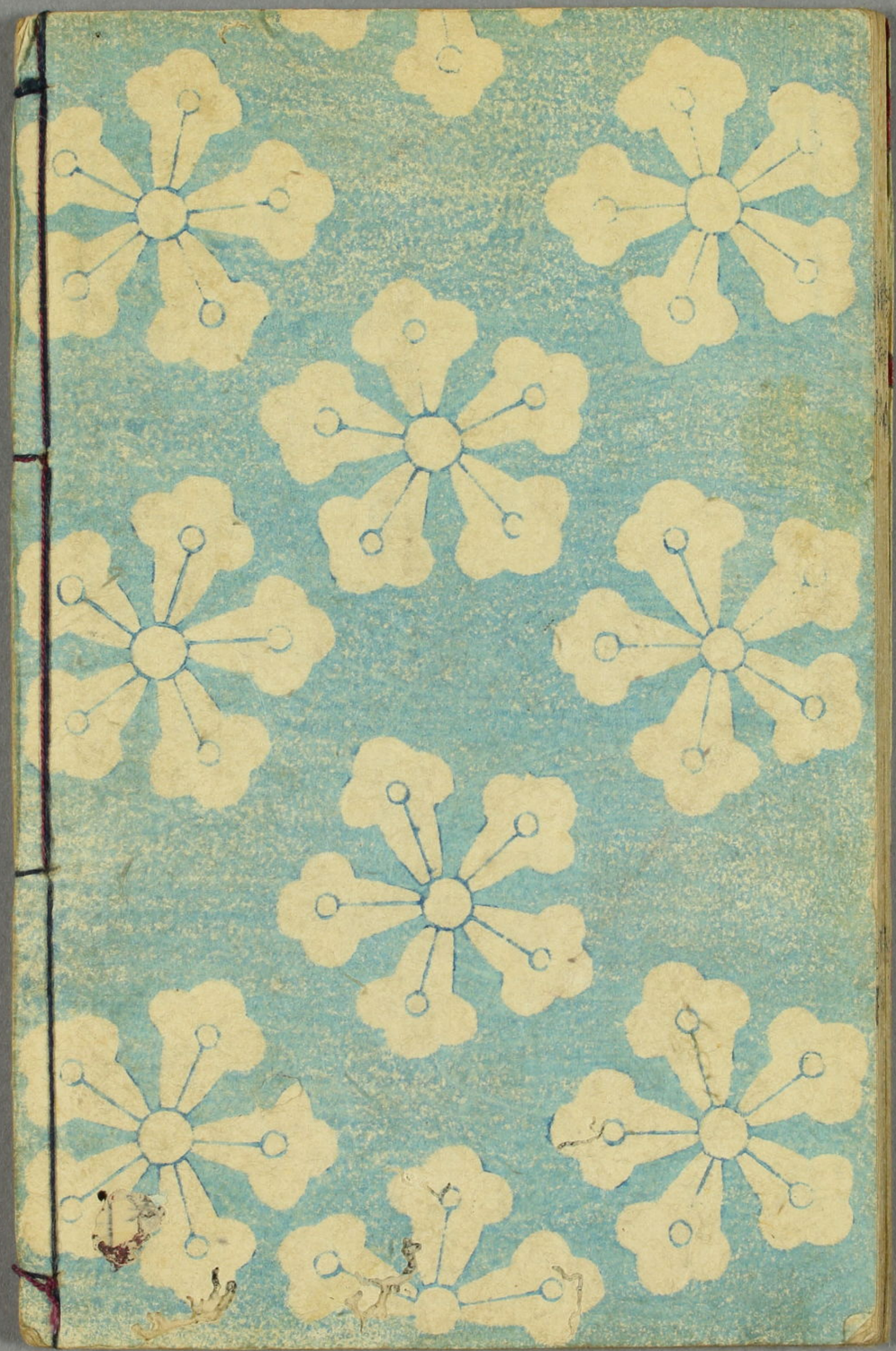
七夕ぎ葛飾譚　十迫　種彦作　出板　国貞画

新局九尾傳　十三　春水作　出板　国貞画

筆海四國問書　十二　種彦作　出板　国貞画

明鴉墨画廼蒲福　十九　種彦作　出板　国貞画

花封蓉五章　十編　種彦作　大尾　国貞画

八犬傳犬の双紙　五ノ　柳亭作　出板　国政画

南傳馬町壹丁目
蔦屋吉藏板